

## 弁理士

第一三共ヘルスケア  
経営企画部 企画グループ  
法務・商標担当 課長代理  
**黒田義博氏(39歳)**



産業財産権の「四法対照」。黒田氏は問題を解きながら随時条文を確認するため、書き込みでいっぱい

私の学習術

## 仲間からの刺激と連帯感で弁理士の難関を突破

黒田氏は2010年に営業職から法務に異動し、「弁理士や弁理士の打ち合わせで専門用語や制度への理解がなければ、会社としての適切な判断ができないことを痛感した」という。まずは知的財産やビジネス法務に関する検定でそれぞれ2級を取得したが、より専門的な知識を求めて弁理士試験に挑戦した。

弁理士とは特許や意匠、商標など知的財産に関する国家資格で、3次試験まで通過する必要がある。最終合格するのは一桁台という難関だ。黒田氏は11年に本格的に勉強を開始し17年に見事合格した。

短答式筆記試験の直前期は4時に起床して出勤前の2時間を勉強に充て、会社近くのカフェで始業前にさらに1時間。日中は業務に集中してできる限り残業がないように終わらせ、19時からの専門学校での授業に臨んだ。休日は学校での勉強が8時間ほどになる日も多かった。

合格率が低くチャレンジは数年かかるのが一般的なため、家族にも協力を強いることになる。心身共にタフな日々を乗り越える力になったのが、受験仲間との存在だ。二次の論文試験や三次の口述試験では、10人ほどでグループを作って試験対策を行

った。「幼稚園の父親参観や運動会などと模試の日程が重なった場合に、子供の行事を優先しようと気持ちを切り替えられたのは、小さい子供を持つ受験仲間も多く、家庭も大事にしつつ早く合格しようと励まし合えたことが大きかった」。

専門的な知識を得たことで、業務の質が高まっただけでなく、継続研修や勉強会を通じて、他業種の弁理士や知的財産権の研究者などの交流も生まれた。中小企業向けの外部セミナーの講師や、国家試験の試験委員として試験問題の作成に携わるなど活動の場を広げている。